

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 人間としての在り方生き方に関わる倫理的諸課題について多面的・多角的に考察する過程を重視する。文章や資料を読み解きながら、先哲の基本的な考え方等を手掛かりとして考察する力を求める。問題の作成に当たっては、倫理的諸課題について、倫理的な見方や考え方を働かせて、思考したり、批判的に吟味したりする問題や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。

問題作成部会では、この作成方針に基づき、現代の高校生が人間として日常的に直面する倫理的諸課題を具体的な場面と関係づけて、教科書で学ぶ先哲の知見を応用して批判的に吟味する力や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な角度から考察する力を評価できるような問題作成に努めた。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 思想の継承と発展を主題とし、教科書に特筆される思想家やその思想を、思想史の中に位置づけて理解できているかを問うた。学習者が個別事項の暗記から思想史の流れに目を向けてゆくリード文を軸としつつ、思想間の影響関係を教科書知識に基づいて問うたほか、現行の教科書では重く扱われないものの、思想史上重要なポイントを、資料とその解説の読解を通じて学習できるような問題を設けた。

問1では、ギリシア哲学がイスラーム世界を経て中世キリスト教世界に継承されたことを示す事例の説明文について、正誤の組合せを問うた。正誤のポイントは教科書知識の範囲内であったが、正答率は低く難問となった。本大問の主題をよく表現した問題ではあるが、問題全体の巻頭である問1が昨年度に引き続き難問になったことについては、今後留意したい。問2では、儒教とそれに関連する思想家と先行思想との影響関係を問うたが、正答率は低かった。思想史的な知識に加え、孟子思想の正確な理解もポイントになる問題であったと言える。問3では、各領域の先哲らの先行思想への批判について問うた。標準的な難易度であった。③を選択する誤解答が目立ったのは、「あらゆる」の語がいわゆる「誤答マーク」と認識されたためかと推測される。問4は中国仏教に関する資料の正確な読解を問う問題であったが、「アートマン」「ブラフマン」を取り違えた誤解答が目立ったため、インド仏教の知識も正誤のポイントになったと考えられる。問5ではユダヤ教に対する新約聖書の記述を問うた。正答率は非常に高く、成績最下位層を識別できたに留まった。問6ではイスラームとユダヤ・キリスト教との対比を問うた。正答率は高かったが、アッラーをユダヤ・キリスト教の神より上位とする誤答は一定数選択され、成績最下位層の識別に有意に機能した。問7では、ギリシアの自然哲学者に見られる神話的世界観からの影響を説明した資料を示し、知識と読解力を問うた。正答率は高いが、成績上位層と下位層の正答率の差が大きく、識別力の高い問題であった。問8では、仏教における縁起解釈の発展を示す資料とその説明文を提示し、知識と読解力を問うとともに、本大問の主題への理解も問うた。正答率は標準的で、識別力も高かった。本大問の主題をよく表現し、外部からも好評を得たが、問題文が長大になりすぎた憾みがある。

第1問全体の得点率は58%であり、理想に近い難易度であったと言えよう。また、ほとんどの問題は高い識別力を示しえた。ただし、主に問8のために本問全体が10ページと長大にな

ったことで、後半の問題の解答時間を逼迫した可能性が否定できない。外部からも指摘のあった問題分量については、受験者の負担軽減のために、今後より一層留意したい。

第2問 近年のウクライナ危機などの国際紛争、新型コロナウイルス感染症など、人類の生存が大きく脅かされるなかで、「平和」の持つ意味を、学校での学びだけではなく、家庭でも考えてもらうことを狙いとして場面設定を行った。市民講演を聞いた後の高校生と祖母の対話からはじまり、図書館での調べ学習、祖母から贈られた本の内容を問う場面へと展開する流れの中で、日本思想史に関する知識を問うとともに、思想家の資料の読み取りや、資料をもとに倫理的な課題を論理的に思考する能力を問うた。問2だけが極端に正答率が低かったが、それ以外は標準的な正答率となった。「世界が再び平和から遠ざかろうとしている昨今にあり、意義深いテーマ」と評価された。細かい知識を問うものや難易度の高い問題があったという分析があったが、どの小問も教科書をしっかり勉強していれば解けるようになっている。

問1は、日本の神々と災害の関係、折口信夫の「まれびと」論、柳田国男による古代の祖霊観、神観念を問うた。「きわめて平易」という評価があった。問2は、古代の仏教についての知識を問うた。古代前期での鎮護国家や後期での浄土信仰に至る基礎的な仏教史の流れ、鎮護仏教や浄土教の基本内容をおさえていけば容易に解けると予想していたが、正答率は倫理の全部の問題を通じてもっとも低かった。人物やその事項等の暗記的な学習ではなく、思想の大きな流れに沿った体系的な学習が求められる。問3は、無常観についての知識と、『方丈記』、『徒然草』の主張を読み取る倫理的な思考力を問うた。「平易」とする評価があった。問4は、江戸時代の儒教の知識を問う問題である。暗記だけでは解けず、教科書に従って江戸時代の儒教史を理解することを求めた。正答率はやや低かったが、「良問である」との評価や、「基礎的基本的な知識を問う」が「正確な理解が求められ」とする評価があった。問5は、石田梅岩を題材にして江戸時代の町人、民衆の思想の理解を問うた。同じ町人思想家の山片蟠桃や、また当時の封建社会を鋭く批判した安藤昌益の思想の違いが分かれば、それほど難しくはない。問6は、横井小楠の思想についての知識と、資料から小楠の主張を読み取る倫理的な思考力を問う。横井小楠は過去の入試ではあまり出題されなかったが、日本の平和思想を考える際には必須の思想家である。小楠は全ての教科書で記述がある。問7は、近現代において平和を説いた思想家それぞれの思想家が説いた思想内容について、やや細かい知識を問うたが、「基礎的基本的な知識の問い」と評価された。問8は、吉野源三郎の文章の読み取りを通じて、引用した文章を正しく読み取り、平和に関する倫理的な思考力を問うた。正答率は高かった。他国への敵対的態度の発生は、共同体内部の分断にこそ潜在的に看取できることを喝破した吉野の文章は、大問を締めくくるに相応しい。

第3問 「美を感じる心」をテーマとして、美的感性及び芸術の価値評価に関する高校生の意見交換と自己省察を通して、美と芸術が様々な倫理的テーマと関係を持つことを理解し、それらのテーマについて思考を深めるよう促した。Ⅰの会話文では、絵画作品の対話型鑑賞を行った後の高校生たちが、芸術作品の価値評価について、相対主義の立場、普遍主義の立場、対話を通じた視野の拡張重視の立場に分かれて意見を述べ合い、Ⅱの会話文では、美を評価することが不平等の一因となるとするルソーの資料を読んだ高校生たちが、他者の美的評価自体を否定する立場、他者の個性を尊重する立場、他者の内面の美を評価する立場に分かれた。このように、それぞれの会話で主題について複数の立場を示すことで、「自分自身ならどの立場をとるか」を自問できるような構成とした。最後に、振り返りノートにおいて、他者の内面の美の評価が、他者の個性の尊重を要求するものであり、そのためには、対話を通じた視野の拡張が必要であるという見解を提示することで、第3問の諸主題の有機的連関が把握で

きるようにした。美的な嗜好や芸術の価値判断には、自分とは異なる他者に対する向き合い方が含意されているというメッセージを伝達することを目指した。「倫理の授業における探究学習の可能性を示す大問となっている」との評価をいただいた。

小問のうち、問1、問2、問6、問7は近代西洋思想についての知識・理解を問う問題であるが、特定の思想家や運動と、それに関連するキーワードを結び付けるだけでは正しく解答できず、思想内容の正確な理解を要求するような問題の作成に努めた。そのこともあってか、問2、6、7では比較的正答率が低くなった。問2では「職業人」が意味するところのもの、問6では、(ニーチェ自身が提唱する思想というよりも) ニーチェが批判した「ルサンチマン」の特徴、問7では、J. S. ミルの「他者危害原則」と「多数者の専制」の内容を正しく判断することが、受験者には難しかったようである。問6については、問いかけ文や正答選択肢の表現に改善の余地があるとの評価をいただいた。また、問7についても記述が分かりづらいとの指摘があった。真摯に受け止めたい。問1は、インターネットで調べた内容から誤りを見つける形式をとることで、評価においても「情報活用能力を意識させる工夫」を認めていただいた。問3、問4、問5では資料を提示し、その正確な読解を求めた。問4の出題に際しては、資料(ヒューム「趣味の基準について」)それ自体が読解のために高度な思考力を要求すると考えたが、結果として正答率が非常に高くなった。問3、問5では、資料の読解に加えて思想家についての知識・理解も問うことによって、複合的な形式の問題を作成した。ただし、問3は資料(カント『判断力批判』)の文章が短く、読解が容易であったためか、正答率はやや高くなった。また、選択肢の中で、カントについての知識・理解を問う部分と資料読解部分との関連が弱いとの評価をいただいた。一方、問5は資料(ルソー『人間不平等起源論』)及び関連する会話の空所を補う語句の正しい組合せを問う問題で、この出題形式のためもあったか、正答率は比較的低くなった。第3問の趣旨を問う問8は、小問の中で最も正答率が高くなった。問4の資料も反映すれば更に良かったとの評価をいただいた。重く受け止めたい。

第4問 なぜ人は後悔するのかという問題を考えることを通して、反省的熟慮をする行為者としての自己の存在というものの輪郭を捉えられるよう、作問を工夫した。責任を問い難い「行為の境界事例」とも呼ぶべきものの帰結に対して覚える後悔は、不合理な苦痛の引き受けとして切り捨てられがちである。しかしながら、そのような単純な線引きをすると本質的問題が見過ごされてしまいかねない。そこで本問では、登場人物がともに一つの問いに向き合い、哲学的な探求の手順を踏むことで「後悔」や「世界と自己の関係」といったものについての理解を深めるというストーリー展開を心掛けた。

大問の趣旨と特に関係が深い問題としては、問1、問4、問7(1)、7(2)、問8が挙げられる。問1は、過去と向き合い続ける態度をテーマとしつつ、国際平和分野の知識を問うた。教科書記述としてはややマイナーなヴァイツゼッカーに関する問題であったが、正答率は妥当な範囲に収まった。問4は、大問の趣旨に即した資料の読み取りを課す問題である。心理学のグラフを提示し、後悔のポジティブな効果についての思考を促す問題であった。正答率は適正であったが、一部の受験者は心理学の実験を用いる新しい出題形式に対応できていなかったようである。実験プロセスを理解したうえで結果の数値の読み取りを求める本問は、「良問」の評価も受けており、資料読み取りとして意義のある出題形式を提示できたと思われる。問7(1)は、後悔というテーマについて語る(2)の資料問題のテキストが、教科書でも紹介されているなじみの深い哲学者であるハイデガーの議論と関連性を持つということを示しつつ、思想についての知識を問う問題であった。この問題については正答率の低さから、

時間切れにより受験者は選択肢を吟味することが難しかったのではないかという御指摘も寄せられた。哲学上の用語を正確に理解できている受験者は確実に回答できており、一定の識別力を有する問題であったと考えられる。問7(2)は、大問の趣旨に即した現代の思想家に関して、資料の読み取り能力と思考力を問う問題である。問7(1)とセットの出題としたが、やはり教科書記述のない思想家の資料については、教科書上の知識と絡める工夫をするよという指摘をいただいた。問8は、大問の趣旨に即して、会話文を読み取りながら思考する能力を問う問題である。この種の問題では例年、正答率が高くなりがちであったが、本問では適正な範囲に収まり、大問全体についての理解と論理的思考力を問うという出題意図にかなう問題となったと言える。

その他の問いについては、家族の有り方についての問2、情報倫理分野の問3に関しては、いずれも標準的な知識を問う問題である。これらの問題については教科書の記述自体が薄く細かな知識を問う結果になりがちであるが、正答率も妥当な範囲に落ち着いた。問5、問6は心理分野の思想家の主張や用語の正確な理解を問う問題であった。組合せを問う形式が功を奏し、正答率も妥当な範囲に落ち着いた。

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

高等学校教科担当教員からは、設問数は「適切」であり、「設問によっては一つあたりの分量が多いものもあったが、全体としての量は受験者が時間内に解くことができる」とコメントいただいた。難易度に関しては、「難解な問題も中にはあったが、いずれの大問もバランスよく出題内容や出題範囲が取り上げられており、全体の難易度としては標準である。試験問題を通して現代の青少年に思索を深めさせたいという作問者の意図が感じられた」との評価をいただいた。

また、「全体を通して、原典資料などに表れた先哲の思想を基点に、他者との対話によって問いを掘り下げ、思索を深めていく学びの過程を表現した作問であり、授業改善に示唆を与える」と、おおむね適切であったという評価をいただいた。全体として、試験問題の内容・範囲、試験問題の分量・程度、試験問題の表現・形式等について妥当であるという評価をいただいていることは、適正な作問ができたものとして肯定的に自己評価したい。他方で「高等学校での学びが大学での研究や真理の探究にどのように発展していくのかを見通す知性あふれるリード文がない」との指摘もいただいているので、今後の参考にしたい。

共通テストが「単なる入学試験としての性格以上の教育に関する重い役割を担っている」ことについてあらためてご指摘もいただいている。今回の評価に甘んじずに、良問の作成に努めたい。

4 ま と め

委員間の連携も円滑に進み、問題の作成に当たった。限られた時間内に膨大な作業をこなすべく、従来の方式を合理化する工夫を加えた。問題としての安定性を重視しつつ、倫理的諸問題への関心を受験者に促すテーマを設定した。難易度においても、正答の確実性についても、適切な出題ができたと思われる。

教育研究団体からは、「高等学校での学びが大学での研究や真理の探究にどのように発展していくのかを見通す知性あふれるリード文がない」との指摘をいただいた。今後の参考にしたい。

高校生の学びの指針となるだけでなく、高校生へのメッセージとなること、教育現場における改善に資するような資料を活用することなどの課題を、更に充実できるように取り組んでいきたい。またその際、問題作成方針に沿いつつ、受験者に教科書で学習した基本的な知識を踏まえ、多様な資料を活用して考察させる質の高い問題を作っていきたい。